ちょ！ナニしちゃってんの！？

不知火　暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ちょ！ナニしちゃってんの！？

【Ｎコード】
Ｎ２２４７Ｒ

【作者名】
不知火　暁

【あらすじ】
空海陸人と九重千切はらいむとくるむを名乗る双子に出会う。成り行きで双子の願いを叶えてやることにした陸人たちであったが…。

続『え？ナニ言っちゃってんの！？』

あらすじ紹介　人物紹介（前書き）

この話は『え？ナニ言っちゃってんの！？』の続編です。
この話を講読して下さる方は、『え？ナニ言っちゃってんの！？』からお読み下さい。

この回は、『え？ナニ言っちゃってんの！？』の簡単なストーリー紹介と、登場人物の紹介が載っているものですので、必要のない方は流し読みして頂いて構いません。

あらすじ紹介　人物紹介

まず、この物語を語るにあたって、前回の話を知っておくことは必要不可欠だろう。

と、いう訳で。

前回の話の簡単なあらすじと人物紹介をさせて頂こう。

！？　！？　！？　！？　！？

前作のあらすじ紹介

僕、空海陸人（そらみくがひと）は十八の誕生日にむちゃくちゃ美人で、不思議な雰囲気を漂わせる女性、九重千切（ここのえちぎり）と出会う。

九重は僕に向かっていきなりわたしと結婚しろとか言ってきた。

え？ナニ言っちゃってんの！？この人！！と思う僕だったが、明らかに変人の類である九重に惚れてしまった。

この人可愛いし、話くらいは聞いちゃおっかな、って感じのノリで九重の話を聞いてみたところ、僕と結婚するとかいう話は九重が僕に一目ぼれをしたかららしかった。

単純に嬉しくはあったのだが、そんなので結婚を決められても…って感じで。

それからなんやかんやあって、九重を家に連れて行くことになった。
その途中で、この世とあの世の境界線とかいう、通称“狭間”に入ってしまった僕らだった。
そこで見たのは異様に気持ち悪い顔をしたてるてる坊主。
その時は何ともなくやり過ごせたのだが、僕はこの“狭間”であんな恐ろしい目に合うとはまだ気付いていなかった。

翌日、僕の学校に乗り込んできた姉貴と九重はスポーツカーに僕を乗せて（誘拐もどき）疾走。
理由は“狭間”にいる人型の管理人に殺されるとか。
その意味は、すぐ知ることになる。
またも“狭間”に入ってしまった僕らを襲ったのは真っ赤な目をした少女と真っ青な目をした青年だった。
二人（二体？）に九重は殺される。
僕を庇って。
それに怒りを覚えた僕は。
知らぬうちに二人を半殺しにしていた。

九重を失い、心身に傷を負って、失望していた僕の元に再び九重は現れた。

わたしは管理人なんだ

とかいうことをカミングアウトして、僕を驚かせた。

何にしても、九重が生きていて良かった。
僕たちはその事件をきっかけに、付き合い始めることになった。
記念すべき、七月十日。

！？　！？　！？　！？　！？

登場人物紹介

空海　陸人　主人公
　高校三年生（１８）
　考えなしのお人よし

九重　千切　管理人
　金髪碧眼の超絶美人
　陸人とは恋人関係
　年齢不詳

空海　風雲（かざぐも）　陸人の姉（２１）
　重度のブラコン
　人類最強伝説

空海　氷月（ひづき）　陸人の妹（１３）
　百合
　不器用

更科　来夢（らいむ）　双子兄（１４）
　大人っぽい
　賢い

更科　来夢（くるむ）　双子姉（１４）
静か
人見知り

謎の男　らいむとくるむに力を与えた青い帽子を被った男

その他

管理人　“狭間”を管理するための存在
人型六体と、でっかいてるてる坊主のようなタイプの
管理人がいる

“狭間”　この世とあの世の境界線
本来は入ることが出来ない
大きな時計台と花畑、通称三途の川がある

あらすじ紹介　人物紹介（後書き）

ざっくりした紹介ですみません。

本編は第二部から始まりますので、是非『え？ナニ言っちゃってんの！？』に続いてこちらも読んで頂けたら幸いです。

はじまり　―千切―（前書き）

この作品は『え？ナニ言っちゃってんの!?』の続編です。
この作品を読んで下さる方は是非『え？ナニ言っちゃってんの!?』から講読していただけると嬉しいです。

はじまり　―千切―

七月十八日。

九重（ここのえ）千切（ちぎり）は、町を歩いていた。

行く当てもなく、ただふらふらと。

彼女はとても美しい女性であった。

輝くような金髪に、明るい碧眼。

白い透き通るような肌に、長くすらりとした手足。

すれ違う人たちが思わず振り返ってしまうほどの美人。

そんな彼女が何故町を一人でふらふらと歩いているのかと言うと。

約一週間前から付き合い始めた彼氏がとある病院に入院していた。

彼女は彼を毎日のようにお見舞いしていたのだ。

だが、今日会いに行ったときに運悪く彼は睡眠中であり、つまらないから起こそうとしたら治りかけていた傷に刺激を与えてしまったらしく、ずっと呻いていた彼を見ていたら申し訳ない気持ちになって出て来たのだ。

しかし、根無し草の彼女には帰る場所が無いので、彼が落ち着く頃まで町で時間をつぶそうかと思ったのである。

まあ、町と言っても、小さな商店街なのだが。

彼女はふらふらと商店街を歩いて、やがて商店街のはずれに一人路上ライブしている女性ギタリストを見つける。

彼女はそのギタリストの前で立ち止まり、そのＪポップを聞き始めた。

彼女は一曲を聞き終えると美しい笑顔を浮かべて、拍手をした。

「なんと素晴らしい！良い曲だ。とても素晴らしかった！」

にっこりと、優しい笑顔で女性ギタリストを称賛する。

ギタリストは照れくさそうにありがとうございます、と頭を下げていた。

それを遠目で眺めていた者が一人。

再び歩き始めた彼女の後ろを追っていく。
そして追いついたところで声をかける。
「すみません」
彼女はその声に足を止めて振り返った。
目の前に立っているのは、一人の男。
彼女は怪しむことなく微笑んで、
「何か用か？」
言う。
「僕は町中の人にインタビューしてまして」
「おお、インタビューか。良いぞ！何でも訊いてくれ！」
「先程路上ライブしていた人に、声をかけていましたね」
「ああ」
彼女の元気な返事に、男は少し眉を寄せる。
男は知っていた。
人は皆、嘘つきだということを。
「実は、遠くからでも観測できる嘘発見器であなたを観察させていただきました」
こう言うと、人は少なからず動揺するのだ。
しかし。
例え嘘をついていなくてももしかしたら、と考えてしまう。
本音しか言っていない者などいない。
「そうか。なら貴様も聴いていたんだな。あいつはすごかった！思わず称賛してしまうほどだったよ」
彼女は笑顔でそう言った。
「いえ、少し嘘の反応を示して――」
「わたしは嘘をついてなどいない」
はっきりと。
はっきりと、彼女は言う。
自信たっぷりに。
「それは機械の故障だ。直した方がいい」

男は驚いていた。
ここまではっきりした人は見たことがなかった。
「そう、かもしれませんね。点検します」
「ああ。がんばれ！」
彼女は美しい笑みを浮かべて言った。
「ありがとうございました」
「もう良いのか？じゃあな」
彼女は颯爽と、男に背を向けて歩き出した。
男はしばらく彼女の後姿を見送って、元の姿に戻る。
男から少年に変わる。
少年は静かに笑った。

「すっげえかっけえ！」

そして、彼女の後を追った。

はじまり　―陸人―

空海陸人（そらみくがひと）。
十八歳。
高校三年生。
現在リア充。
僕の紹介は、それくらいである。
僕は今とある病院に入院していて、朝に突然一週間前に出来た美人の彼女に傷を負っている腹に思い切りダイブされ（しかも気にしないでって言ったのに逃げられ）て、落ち込んでいた。
そんな時にびっくりだが、突然中学生くらいの女の子に襲われた。
意味が分からない！
病室で読書をしていたらいきなり襲撃された。
しかもなかなか可愛い。
紺色のセーラーに、同じ色のプリーツスカート。
そしてその上に何故か白衣をまとった可愛らしい女の子。
茶色の肩まで伸ばした柔らかそうな髪、とろんとした茶色の瞳。
彼女がいなかったら好きになっていたかもしれないくらい、好みの女の子なのだが。
その女の子は超能力を遣う。
……。
いや、ホントだよ？
比喩とかじゃなくて！
頭がおかしい訳でもなくて！
女の子はなにかを投げてくる。
なにかっていうのは、投げてくるものが見えないからそんな曖昧な表現になっていて…。
いや！

違うから！イカれてないから！
だって本当に分かんないんだもん！
どうやってやってんだよ！？あれ！って感じ。
少女が腕を振ると、僕の腹に枕とかがぼふ、ってあたる。
普段ならば微笑んで流せたのだが、僕は現在胸から腹にかけてけがをしている身なので、容易に流せないところがあるのだ。
「ええと、な、何かな？」
一応声をかけてみる。
腹痛えなあ…、と思いながら。
すると、傍にあった花瓶が落下する。
大きな音をたてて花瓶が割れる。
ちょ…誰か来てぇええ！！！
この子怖い！この子怖い！
無表情だし！
デジャヴ！
最近こういうのあった！
ナースコール！
プリーズコールミー！
そういえばナースコールは姉貴にぶっ壊されたんだったなあ！
ナースなんて姉さんだけで十分です、とかふざけたこと言って！
なんで個室じゃねえのに僕しかいないんだろうな！
昨日退院した村上のおじいちゃんいたらまだなんとかなったかな！？
目の前の女の子は何もしていないのに花瓶が割れたり、カーテンが外れたりするんだぜ？
怖いよ。
ホラーだよ。
ポルターガイストだよ！
と。
「さっきは悪かったな、陸人！」
僕の愛しの彼女が帰って来た。

「待ってたよ！マイハニー！」
よく来てくれた！
彼女の九重千切は少女をみて、数秒沈黙して、
「浮気か？」
低い声で言った。
こわっ。
こっちもこわ！
「ちげえよ！マイハニーとか恥ずかしいこと言ったじゃん！」
「すまないダーリン」
「……」
さらりと言われた。
何だこいつ。
意味なくむかつくぞ。
そして、僕は九重の背後にいる人物に気が付く。
帽子を目深にかぶっていて顔は窺えない。
「…だれ？」
僕に言われて九重は初めて気付いたらしい。
「…？…誰？」
「いや！お前が連れて来たんじゃん！」
誰？って、ほんと誰だよ！？
「らいむ…」
と。
今まで一言も喋らなかった少女が言った。
声かわいっ！
九重の背後にいた人物も驚いたように言う。
「くるむ…！」
……。
…いや。
誰？

更科来夢×更科来夢

「更科来夢。中二」
「…更科来夢。…同じ」
ややこしいな。
字で見たら、だけど。
あれから二人に話を聞くことにしたのだが。
二人が顔見知りであったのは当然だと思った。
九重についてきていた子は、帽子を取ったらセーラー白衣の少女に
瓜二つだった。
ドッペルゲンガーかと思った。
え？双子？
双子ってこんな似るんだ？
びっくり。
「え、と。くるむちゃんとらいむちゃん…」
「あん？ふざけんじゃないっすよ。殺しますよ」
敬語なのかどうかが微妙な喋り方で言われた。
年下の子に殺害予告された。
うん…。
何で怒られたのか分からない。
「俺、男。見てわかるっしょ」
「分かるか！」
だって見た目超可愛いもん！
二人とも似すぎててどっちがどっちか分かんないもん！
え？どっちか男の子なの！？
嘘だろ！！！
僕は認めないぞ！
「俺は学ラン着てんじゃないですか」

らいむ…くんは自分の着ている服を示して言う。
確かに、くるむちゃんとは違ってらいむ…くんの服装は学ランだけども！
白の学ランだけども！
「髪が長いからいけねえのか…？」
らいむ…くんはぼそりと言った。
すると、らいむ…くんの肩まであった髪がさっぱりと短くなる。
「どうでもいいけど『らいむ』と『くん』の間に三点リーダ入れんのやめてくれないすかね」
「いや！その前にツッ込む場所があるはずだ！」
え？普通にスルーされたけど、何今の！？
マジカル！
「おお。髪型で結構変わるモノだな…」
九重はらいむくんの髪を眺めながら感心したように言う。
そこ？
九重は流石に人外なだけあるな！
ちなみに僕の彼女である九重は“狭間”という世界（？）から来た人で、まあ、人間とは言い難い種である。
とある事故に巻き込まれたときは、完全に死んでいたはずなのにけろっと生き返ってきたり。
びっくりだった。
嬉しいことではあったけれど。
それに、その事件があったから今僕らは付き合っていると言っても過言ではないし。
九重がいたから僕は今こうして五体満足でいられるわけだし。
だから九重のことは大抵のことは許せてしまう。
変な所もあるが、可愛いし、優しいし。
もうめっちゃ好きだ。
「なに惚気（のろけ）てんすか」
「何で僕の周りの奴らは心が読めんだろうな！？」

「顔みてりゃ分かるっすけど」
「顔見ただけで惚気てんのが分かるの！？」
初めて知った。
これからは人の顔を良く観察しながら話をしよう。
「あの、おねーさん」
らいむくんは九重に目を向けて言う。
「ん？何だ？というか千切でいいぞ」
「じゃあ千切さん」
なんの抵抗もなく呼んだ。
変な名前なのに！
明らかに外人の顔をした（本人曰くフランス人らしい）九重のアンバランスな名前を普通に！
やるな…。
いや、名前の変さに関しては僕も人のことは言えないんだけどね！？
陸人って…。
「りくとさんですか？え？ああ、くがひとさん…（笑）」
とか言ってくる失礼な奴もいるけど！
「えー。くがとかー。読めなーい（笑）」
とか言ってくる失礼な奴もいるけど！
「え？くがって読むの？そんなん源氏物語くらいだと思ってたー（笑）」
とか言ってくる失礼な奴もいるけど！
てゆーかみんな含み笑いしながら（中にはあからさまにせせら笑いしながら）言ってくるんだよなあ！
人の名前を馬鹿にしてはいけないと思う！
親父と母さんに謝ってくれ。
まあ姉貴は高校生の時に、
「え？かざぐも？マジウケるー」
と言ってきた相手を連休にはいる前の日に掃除用具入れの中に力づくで押し込んで扉が開かないように金具を歪めて閉じ込めたらしい

が。
ちなみに閉じ込められた子は親の通報で捜索されたおかげで、その日の夜に泣きじゃくっていたところを発見されたそうで、歪んで開かなくなった扉をあの手この手でこじ開けてやっとこさ救出できたのだと聞いた。
姉貴はそのことについて聞かれても、顔色を変えず平然と真実を語り、学校中から恐れられたという伝説がある。
弟としては結構複雑なのだが、自らの名前の誇りを守った結果が全生徒の周知の的、というのは少し尊敬する。
まあ名前のことはどうでもいいとして。
らいむくんは笑顔で言う。
「もっと分かりやすく話せ」
「千切さん、すっげえかっけえっすね！」
九重はこいつは何を言っているんだ、という顔でらいむくんを見ていた。
まあ確かにね。
分かんないよね。
普通分かんないと思うよ。
え？なにが？ってなるよ。
「俺千切さんに惚れちゃいました！」
は？
おい。
「可愛らしい奴だな」
九重は微笑んで言う。
おい、おい！
それは――
「しかしわたしは陸人を愛しているからな。すまん」
「……」
僕も愛してるよ、と言えない自分が愚かに思える…。
こいつはなんか格好良いな！

堂々と言う九重にまた惚れてしまいそうになった僕だった。
「これの何がいいんすか？」
らいむくんは僕を軽く睨んで言う。
これて。
せめてこいつって言えよ。
いや、こいつ、なら妥協するって訳じゃないけどね？
ま、でも少し知りたいかもしれない。
僕のどこが良いんだろ？
そう思っていたら。
九重はにっこりと微笑んで。
「見た目、ピンチになったら助けてくれるとことか、料理が上手いところとか、妹に優しいところとか、言動とか、交友関係とか、髪の毛の質とか、名前とか、笑顔とか、優しいところとか、ゲームの道具を必死になって集めてる時の後ろ姿とか、九重って呼ぶ時の声とか、リモコン探すときの手の動きとか、近所の犬に吠えられた時にムツゴロウさんみたいにすぐあやしてしまうところとか、ツッコミとか、イヤホンで音楽を聴いてる時の横顔とか、寝ているときの――」
「止めようか！！！？」
すんげえ恥ずかしい。
なんだこいつ！！
わざとか？
わざとなのか？
んなことこまやかに言われたら僕が死ぬ！
羞恥心で人間は死ぬんだね！
初めて知ったよ！
あっはっは！また賢くなったなあ！
「良くない箇所なんて見当たらないな！」
うん。
嬉しい！

嬉しいけどね！？
おさえようか！
胸の内に抑えておこうか！
「……」
ほら！
らいむくんめっちゃ引いてんじゃん！
くるむちゃんまで引いてるしね。
「まあ…。千切さんが変な人だとしても、正直者は嫌いじゃないんで…」
らいむくんは九重を諦めたらしい。
そうだ。
九重の相手は君にはまだ早い！
ていうか僕の彼女だしね。
僕も九重は変な奴だと思うけども。
九重には良いところがたくさんあるからな。
「あの、さあ…？」
「なんすか、むーさん」
本題に戻ることにしよう。
「むーさん！？」
どこからきたんだ、その愛称は？
「雰囲気ですかね」
「僕はむーさんっぽいってことか！？」
無駄に嫌だ！！
「むーさんじゃないんすか？」
「何故驚く！？むーさんじゃねえよ！！！」
それと九重！
ほう、むーさん…とか、そのアイデア良いな、みたいな顔しながら呟かないでくれ。
「君たちは、何者なのかな？普通の人とかでは、ないよね？」
「そっすねえ。まあ」

らいむくんは少し考えるようにしてから、
「エスパーボーイらいむ、ってところすかね」
キメ顔で言った。
「うん。ダサいね。結局なんなのかよく分かんないし」
普通に訳分からん。
そして何故どや顔を…。
上手くないよー？
全然上手いこと言えてないよー？
「…えすぱーがーるくるむ」
「そういう問題じゃなくね？」
しかもひらがな！
「エスパーヒューマノイド更科！」
「九重も入ってきたー！？」
と。
いう訳で。
しばらくこのくだらないだらだらした会話が続いたので、結局双子ちゃんの能力の話は次回に持ち越しとなる。

何故くるむちゃんが僕を襲ったのか。

理由。

「空と海…名字が無駄に壮大で苛立った…」

何だそれは。

そんなふざけた理由で僕は痛い思いをしたのか！？

病室の前に名札をかけるのが怖くなってきたぞ…。

「空に海に陸って！」

らいむくんが笑いながら言う。

「名前を馬鹿にするのはやめてくれたまえ！」

お願いだ。

「俺らのほうが名前馬鹿にされてっと思うっすけどね」

何気に気に入ってんだからさ。

らいむくんはどうでもよさそうに言う。

まあ、確かに。

瓜二つの顔で『更科来夢』の名札を二人につけられたらどっちがどっちなのかは間違いなく分からないだろう。

何故この子たちの親御さんは同じ漢字で名前を付けたのだろうか。

その点でいえば僕よりも何かを言われている可能性はあるだろう。

「別にいいすけどね。名前なんて。親が勝手につけてきたやつですし。ま、姉さんと読みが一緒って言うのは仲良しっぽくていいっすけど」

「…私も兄さんと一緒の名前で嬉しい…」

らいむくんの言葉でくるむちゃんもこくこく頷いて言った。

大人しい系の子なんだな。くるむちゃんは。

そして気になったのだが。

「どっちが上なのか分からん」

くるむちゃんはらいむくんのことを兄さんと呼び、
らいむくんはくるむちゃんを姉さんと呼ぶ。
もしかしなくてもおかしくね？
なんで九重はツッこまねえの。
おかしいと思ってんのは僕だけなのか。
見ると九重は、髪の毛の端を一心不乱に見詰めていた。
話を聞いてすらいない。
何が気になるのやら。
「…らいむ兄さんはらいむ兄さん…」
「くるむは俺の姉さんだし妹っすよ」
だそうだ。
全然分からない。
踏み込んではいけないところだと思うので、深くは探らないが。
「ま、話戻すけど。くるむちゃん。それにらいむくんも。二人とも、普通じゃ、ないよね？」
普通の人は髪の長さを一瞬で変えたりはしない。
らいむくんはちらりとくるむちゃんに目をやってから、
「その反応、なんか知ってる感じすか？」
言った。
「は？」
「いや、普通じゃないと思うのならもう少し…なんというか…驚いてもいいかな、って」
「あー…。まあ、最近三年分の驚きを使うような事件があったからね」
僕は苦笑して、九重を見た。
九重は僕の視線に気づいて、髪の毛の先から目を離して、小首を傾げる。
ああ、この可愛さが言葉でしか伝えられないのがもどかしい！
ちょっと幼さが残っているのがまた良いんだよなあ。（これは完全に僕の趣味だけど）

らいむくんは僕の様子をみて呆れた風に言った。
まるで、うぜえくらいのラブラブっぷりだな死ねとでも言わんばかりの表情である。
「俺らは、ちょい変なことになっちまいましてね。ま、訊きたいのなら、初めから話します」
相変わらずの微妙な敬語でらいむくんは言った。
「俺とくるむは、あることに巻き込まれちまったんっすよ」

死　死　死　死　死

らいむくんの話を僕なりにアレンジして、それっぽく語ってみる。
らいむくんとくるむちゃんは、お父さんの愛人の子供なのだそうだ。
つまり、正妻の子供ではないらしい。
子供が出来なかった正妻の人、つまり二人の戸籍上の母親は、二人を育てないと言っていたらしい愛人から、らいむくんたちを引き取った。
そして、二人に名前をつけて、たいそう可愛がったそうだ。
しかしその母親は、二人が八歳になるころに病で死んでしまった。
そしてその数か月後に、二人の父親は、実質上らいむくんたちの母親である愛人と再婚した。
もともと二人に愛情を注いでいなかった父親はらいむくんたちを可愛がることはなかった。
それに、元愛人は二人のことを疎ましく思っていたようで、二人は彼女から虐待を受け始めた。
血はつながっていないはずの母親に似ている、と言われて。
叩かれて。
踏まれて。
殴られて。
蹴られて。
「ま、いいっす…」

転がされて。
吊るされて。
絞められて。
斬られて。
焼かれて。
追い出されて。
閉じ込められて。
飢えさせられて。
溺れさせられて。
窒息させられて。
とにかく、酷い仕打ちを受けたそうだ。
心にも身体にも、癒えない傷が残ってしまった。
それでも、二人に大人を、親を頼らずに生きていく術はなかった。
二人で生きたいと願っても、生きることは出来なかったのだ。
そんなある日。
二人がいつものように押し入れに閉じ込められ、いつものように三日間ほど空腹を我慢していた時。
くるむちゃんの意識が途絶えた。
らいむくんは慌てた。
唯一の大切な存在であるくるむちゃんの生命の危機を感じて。
らいむくんは押し入れの戸を叩きながら、精一杯叫んだそうだ。
何でもするから、くるむを助けて、と。
俺は死んでもいいから、くるむを助けて、と。
一生懸命、叫んだそうだ。
お母さん、お父さん、くるむを助けて。
お願いだから。
俺にはくるむしか、いないのだから。
叫んで、叫んで、叫び続けたそうだ。
何時間も。
声が枯れるほど。

そして。
五時間して、押し入れの戸は開いた。
やっと、開いた。
らいむくんは顔を輝かせて、希望を抱いて戸を開けた者を見た。
そこには元愛人が立っていて。
らいむくんを思い切り蹴りつけた。
うるさいんだよ、と。
一言いって。
蹴り続けた。
顔を、胸を、背中を、腹を、足を、腕を。
そしてあろうことか。
意識のないくるむちゃんを蹴りつけた。
一通り二人を蹴りつけたところで。
元愛人は、手にしていた煙草をらいむくんの足に押し付けて。
痛がるらいむくんを無視して。
冷たく言い放ったそうだ。

———お前らを助けるくらいなら、死んでから内臓を売った方がはるかにマシよ。

と。

冷たく、言ったそうだ。
幸いくるむちゃんの意識は戻り、命は助かったけれど。
死んでいても、おかしくはなかったのだ。
らいむくんはその時にあることを願ったらしい。

『くるむを助けられるような人になりたい。
二人だけで、生きていけるように。

誰になるでもいいから。

くるむをこの手で助けられる力が、欲しい。』

そう。

願ってしまった。

同じくくるむちゃんも。

ある望みを持っていた。

『らいむを助けられるような、力が欲しい。

あいつらをやっつけられるような、力が欲しい。

そして、誰にも見つからずに、らいむと二人だけで、

生き続けたい。』

と。

そんな望みを。

抱いてしまった。

抱いて、しまった。

それから二人の運命は大きく変わった。

二人は家を出て、公園で暮らし始めた。

親の財布から金を盗み出して、食料や銭湯の経費にした。

もちろん、そんなもので何日も生きていけるはずはない。

お金が足りなくなると、二人はお弁当屋の裏などで残飯を漁って食料を調達した。

そんな生活でも、二人にとっては、幸せなものだった。

しかし。

らいむくんもくるむちゃんも、段々と、弱っていった。

お金がなければ、生きていくことは出来ない。
けれど、中学生の彼らにお金を稼ぐことなんて出来なかった。
人に助けを求めてみても、助けてくれる者などなく。
二人は毎日、ぎりぎりのところで、ぎりぎりの生活を送っていた。
そんなある時。
栄養不足でぶっ倒れたらいむくんの元に、一人の男がやって来たそうだ。
男は青い帽子を深く被っていて、顔は良く見えなかったらしい。
怪しさまんてんだった男は、らいむくんたちに向けて言った。

「お前らの願いを、叶えてやろうか」

にやり、と。
笑みを浮かべて。
甘い言葉を吐いたのだ。
切羽詰まった状態の二人は。
その言葉に、頼ってしまった。
すがりつくように、求めてしまった。
願って、しまった。

夢は、叶わないから夢。
叶ってしまえば、それは既に夢ではない。
願いも、同じ。
望みも、同じ。
叶わないから、願い。
叶わないから、望み。
叶わないと分かっているから、人は願う。
叶わないと分かっているから、人は望む。
その行為が、罪なのに。
その行為自体が、罪なのに。

いつになっても学ばない。
自分達が何をしているのか。
どれほどのことをしてしまっているのか。
気付いた時には、もう遅い。

後はただ、失うだけ。

二人は、罪を犯した。
願うだけでなく、叶えてしまおうと試みてしまった。
自らの罪で、自らの身を、滅ぼしてしまった。

謎の男のお陰で。
謎の男の所為で。
らいむくんは、自分の姿を一日十二時間だけ、変えることができるようになった。
そしてらいむくんは、自分の姿を変えて、アルバイトを始める。
履歴書をでっち上げて。
日給の出る、アルバイト。
そのおかげで、少しずつだが二人の生活が安定してきた。
お金が入るようになったから。

くるむちゃんは右手で触れた者を透明にすることが出来るようになった。
右手が一度触れた物は手を離しても三秒間は透明になる、という力を手に入れた。
そして左手で、あまり重すぎない物だけだが、遠隔操作で動かせるようになった。
その力で、自らの両親を。
血のつながった両親を、交通事故に遭わせた。
壮大な気持ちで。

爽快な気持ちで。
両親は、全治三か月の重傷を負ったらしい。

しかし。
なんの代償もなく願いが叶う訳もなく。
なんの犠牲もなく望みが叶う筈がなく。
らいむくんは眠ることを許されず。
くるむちゃんは世界の色を失った。

「眠気があるのに、眠れないのは、正直地獄っすよ。
夜は、長いんっすよ。
思い出したくないことまで、思い出す…。
疲れも、とれないし…」

らいむくんは、苦笑混じりにそう言った。

「姉さんも、辛いと思うんす。色が無くなった、世界なんて」
くるむちゃんを見ながら、らいむくんは悔しそうに言った。

だから、戻りたいのだそうだ。
その男を見つけて、元の体に。
男を探して病院に来て、僕に会った（正確には襲った）。
と、いう訳らしい。
思ったよりも、重かった。
二人の過去は。
僕ごときには。
支えきれない、モノだった。

「よっし」

僕は息を深く吸って、言う。
九重が、小さく微笑みを浮かべて僕を見ていた。
「くが兄さんが、助けてやりましょう」
無責任なことを堂々と言ってみた。

らいむくんは、巻き込まれた、と言った。
その通りだと思う。
人の願いは必ず悪心が生まれる。
お金が欲しいと願った人が銀行強盗をするように。
死を強く望んだ人が自殺をするように。
願うことが罪だというのは本当だと思うけれど。
二人は決して、悪いとはいえない。
二人が願ってしまったのは、仕方のないことだと思うし、
そういう環境になってしまったのだから、そこはもう。
誰が二人を責められようか。
僕は、思った。
たとえらいむくんたちが過ちを犯してしまったのだとしても。
それを責めることはしてはならないことだと。

死　死　死　死　死

「君たちは今までどこにいたの？」
「寝泊りっすか？」
「うん」
「ネカフェっすけど…」
「今も？」
「そっす。金そんな持ってないんで」
「じゃ、僕の家においで」
「…人がいい人ほど早く死ぬらしいっすよ」
「そういう褒めてんのかけなしてんのか分からない言葉は言うべきじゃないぞ」

「褒めてんすよ」
「知ってるよ！」
という会話をして、僕らは病院をでた。
僕は実は今日退院。
傷もそれほど深い物ではなかったので、自宅療養というとこだ。
さっきくるむちゃんに傷を広げられたけど。
こんなに早く退院したのにはもう一つ理由が。
「陸人さんのいない生活なんて考えられません！」
「くが兄～早く帰って来てよう！かざ姉に毎日夜泣きされんのもうやだもん！」
と、姉貴と妹に泣きつかれたからだ。
いい年して夜泣きって…。
子供っぽい姉貴である。
そして先程退院の準備を終えて、そこにナースさんが様子を見に来たのだが。
「…。空海さん」
めちゃめちゃ怖い顔でナースさんは僕を見た。
「誰が片付けると思っているんですか」
ナースの籟名（らいな）さんは床に散らばった花瓶の破片や水やら花やらを見下ろして言った。
すごい怖かった。
綺麗な人なのに台無しだ。
まあ確かに花瓶だけではなくナースコールも壊しているんだから（姉貴が）怒るのは当然だろう。
そんなこんなで家に帰った。

「いっぺん死んで来なさいな」
姉貴の第一声。
またかよ。
いつものようにソファに下着姿で寝そべりながらの姿勢で、姉貴は

僕を見て言う。
「今日は陸人さんが帰って来る日だと思って楽しみにしていたのに…。次は年下のこんなに可愛い人たちに暴行していたのですね」
「ちげえっつの！」
ほんっと失礼なこと言うよな！
「と。あら？」
そこで、姉貴は体を起こす。
「それ…」
九重がいたからではない。
姉貴の視線はらいむくんに向かっていた。
らいむくんは体を強張らせる。
当たり前だ。
知らない人の家に行って出会うのが下着姿の女だ。
緊張する…のかな。
我が姉空海風雲(そらみかざぐも)は普通に綺麗な部類の人なので、緊張してもおかしくはないだろうな。
「怪我をしていますね」
姉貴はらいむくんの頬に手を伸ばして言う。
優しく、言う。
らいむくんは驚いたように目を軽く見開いた。
僕も驚きだ。
だって、らいむくんは怪我なんてしているようには見えないから。
しかし姉貴はさも当然のように言う。
「火傷…？可愛い顔をしているのに勿体無い。冷やさなければ…。手遅れかもしれませんがね」
らいむくんの頭を撫でて、僕に、救急箱を持ってきて、と言った。
言われたとおりにする。
姉貴は僕から救急箱を受け取ると、中から湿布を取り出してらいむくんの頬に当てる。
らいむくんは少し顔をしかめたが、特に抵抗はしなかった。

「こっちは顔は大丈夫そうね。でも腕とかは怪我がいっぱい…。何をしたの？」
姉貴はくるむちゃんを見て言う。
確かに。
くるむちゃんのセーラー白衣の下から見える肌には傷が見えた。
姉貴は二人に一通り応急処置をする。
僕は容赦なく二人の服を脱がせ始めた姉貴に慌てた。
急いで部屋を出ると、九重が着いてきた。
「人が良すぎると死ぬらしいぞ」
「何故突然らいむくんと同じことを！？」
九重もよめないやつだよなあ。
「陸人は優しいな、という話だ」
「九重も優しいよな」
「本当か。嬉しいぞ。陸人に褒められてしまった。今人生の半分を使い切っても後悔はないほどの嬉しさだ。この嬉しさを体で表現してもいいのだろうか！」
「落ち着こうか！！？」
何故飛びついてくる！？
人一人に飛びつかれるって、何気に怖い！
九重は本当に何がしたいんだよ。
「愛しているぞ陸人！」
「ああ、もう！僕もだよ！」
ああ。言わされてしまった。
完全なる敗北。
強い。
「…何してんすか。こんなとこでいちゃつかないで下さい」
廊下で抱きつき合っている（ように見える）僕たちを冷めた目で見ながらいつの間にか立っていたらいむくんが言った。
最初はくるむちゃんかなとも思ったが、白ランを着ていたので、すぐにらいむくんだと分かる。

白ランって格好良いよな。
「今はくるむが手当を受けてます」
らいむくんの腕や足は包帯にまかれていた。
「人見知りするんすよ。くるむは。だから嫌がるくるむを押さえて
て、やっと落ち着いたんで廊下で待ってようと思ったんすけど」
らいむくんは僕らを見上げて呆れたように、
「こんなとこでせっ」
「黙ろうか！」
何を言おうとしたんだ。
絶対続きを聞きたくない。
九重は九重で僕にくっついて嬉しそうにしてるし。
はぁ。
「あ。そうだ」
らいむくんは何かを思い出したように、言う。
「あざっす。陸人さん。助かりました」
柔らかく笑って、言う。
さらりと。
あっさりと、言った。
かしこまっていないだけ、本音が見えたような気がして嬉しい。
それに。
らいむくんの笑顔は。
めちゃくちゃ可愛かった。
いや。
落ち着け。
男…男だろう！？
………。
ずりぃよ！
これがオトコノコなんてずりぃよ！
だって可愛いもん！
むっさ可愛いもん！

ごっつ可愛いもん！
「千切さん…。あの…陸人さんが…」
「陸人！らいむは確かに可愛いが、わたしより好きになってはいけないんだぞ！」
「いや、俺が言いたいのは…って可愛い！？傷付くんすけど！」
だから人の心を読むなって！
恥ずかしいだろうが！
プライバシーは守らせて！
「プライバシーなんて言葉知ってるんすね。てっきり馬鹿だと思ってたんで…」
「わりと最近似たようなやり取りあったなー」
最近ってか、二週間ちょっと前？
「え？馬鹿じゃないんすか？」
うわ。素で言われた。
なんか悲しい。
「え？じゃあ、何でそんなに…」
「掘らないで！埋めて！」
「いや。普通に変た」
どす。
どす？
らいむくんの背中にすごい勢いでくるむちゃんがつっ込んできた。
扉を勢いよく開けて、どす、という効果音が合う感じのつっ込み方だった。
くるむちゃんの勢いに押されて、らいむくんがつんのめる。
そして僕らの元へと、二人そろって倒れ込んできた。
僕は抱きついてくる九重を必死に引きはがそうとしているところだったので、足元が不安定だったり。
そして僕らは四人そろっていたって平凡な空海家の狭い廊下に倒れ込んだ。
そこに。

我が家の面倒な変態が現れる。

「ひぁううん！くが兄がチョー可愛い子たちに囲まれてる！ハーレムぅ！？きゃあああ！萌える？羨ましい！けど見てるだけで幸せぇえええ！！」

「うるせえボケ！」

僕は三人の体重に押しつぶされてかすれる声で怒鳴った。

それを無視してダイブしてくる馬鹿が一人。

つまり我が妹である空海氷月（ひづき）が、帰ってきやがった。

「まーぜてぇええ！！！」

そのまま僕らの上に飛び乗ってきて、完治していない傷にダメージを与えまくった。

「ぐぁぁあああってぇえええええええ！！！」

死ぬかと思った。

僕は氷月に無言で拳骨をして、それで許してやることにした。
僕優しい。
その後、懲りない氷月はぐへぐへ笑いながららいむくんとその影に隠れて怯えているくるむちゃんに迫っていた。
「うえへへ…可愛い…じゅる…。二人とも可愛いですねえええええ！！！」
「可愛いとか言わないで下さい」
「……っ！！！」
らいむくんは冷静にやんわりと拒み。
くるむちゃんは首をものすごい速さで振って、露骨に拒絶していた。
「ああ可愛い…お人形さんみたぁい？」
「……っ」
くるむちゃんは完全に氷月を怖がっていた。
当たり前だ。
ぐへぐへ言いながら近寄ってくる変な女が怖くないわけがない。
目、怖いし。
なんつーの？
獣の目？
みたいな感じ。
「セーラー服に白衣ってこんなに萌えるもんなんだぁ…。ゴスロリも着てくんないかなぁ…？」
だから怖いよ。
ゴスロリって…。
本当に持ってそうだよな、こいつ。
「ちぎりんは綺麗系だけど、こっちはこっちで可愛くていいなぁ…」
お前は何様だよ。

「あのー。姉を無意味に怖がらせないで下さい」
「その感じでお姉さんって！！！！」
だから何故あそこで鼻血を出す！？
訳分かんねえよ！僕の妹！
「…。すごく変態臭がするんすけど。陸人さんと同じく…」
「僕も妹は変態だと思うんだー…って僕と同じって！？」
ショックなんだけど！
「まあ、ともかく」
「いや！終わらせないで！」
「くるむは人見知りが激しいから怖がってるだけなんで、申し訳ありませんが少し距離をおいてもらえますか」
「スルーしたうえに大人な対応！？」
それにくるむちゃんは絶対人見知りなだけで氷月を怖がっている訳じゃないと思う。
「ツンデレ！？」
氷月が鼻血の量を増やして言う。
…何故そうなる。
「出血すごいっすよ。大丈夫すか」
「慣れてない感じの敬語がまた…？」
「いい加減にしろ」
「だっ！！！」
僕は氷月の頭を叩いてらいむくんとくるむちゃんから引きはがす。
氷月は引きはがされてもぐへぐへ言っていて気持ち悪い。
こんなのと血ィ繋がってんのか…。
氷月は僕を見上げて、
「ちぎりんの次はこんな可愛い子まで襲ったの！？くが兄ナーイス！！！」
「ナーイスじゃねえよ！九重も双子も襲ってねえし、むしろ襲われた側だっつの！」
「襲われた側！？まさかの！？逆をついて受け―――」

「お前の口が全焼することを強く望むよ！！！」
んだよこいつ。
早く死なねえかなー！
「あ、くが兄退院したんだね！」
「もう良いから飯食って寝ろ！」
「ええ！？駄目だよ！ちぎりんと双子ちゃんとお風呂入るもん！」
「誰がお前を部屋まで運ぶと思ってんだよ！」
前に九重と一緒に風呂入ってぶっ倒れた氷月を介抱したの僕だぞ！？
まあ運んだのは姉貴だけどね！
つーからいむくんは入っちゃ駄目だろ！
こんなに可愛いのだから個人的に認めたくはないけど、らいむくんは男だ。
認めたくないけど。
認めたくないけど！
「わたしは陸人と入るから氷月と双子は先入っていいぞ」
「さらりと何を言っているんだ九重！」
「やはり駄目か」
「当たり前だ！」
「駄目元で言ったから良いのだが、残念だなぁ」
くつくつと笑う九重。
相変わらず美しい笑顔である。
気付くと、らいむくんも九重の笑顔に見惚れているようだった。
僕と目が合うと恥ずかしそうに目を伏せる。
らいむくんは可愛いなあ。
くるむちゃんも可愛いんだけど。
そこに。
「陸人さん、今日の当番は貴方ですよ。お夕食作って下さい」
「姉貴は今日退院した可愛い弟の体を労(いた)われないの！？」
姉貴がリビングから顔を出して言ってきた。
信じられない。

「陸人さんが可愛いというのは否定しませんが。それとこれとは別でしょう」
「一緒だろ！ていうか可愛いに関しては冗談なんだから流してよ！」
「姉さんは学生のころ足の骨が折れていたのに出場した全国高校陸上大会で日本一でしたよ？」
「バケモンか！！！」
もう人間じゃない！
今までずっと疑ってきたけど今確信したよ。
姉貴は人間じゃねえ。
「あら。陸人さんに褒められてしまいましたね。姉さんも陸人さんを褒めたいです。素晴らしい料理を作って下さい」
「褒めてねえよ！煽ててものらない！」
「そうですか…。仕方ないですね。氷月、今日のご飯はお茶漬けでいいですよ」
「作りますよぅ！もう！」
氷月に飯なんて作らせてたまるか！
退院したばっかで氷月の料理食べるとか絶対嫌だ。
「…そこまで言われるとは思わなかったよ…」
氷月が鼻血を拭きながらしゅんとしたように言っていたが気にしない。
お茶漬けという三歳児でも作れる簡易料理を紫色に仕上げることが出来る氷月に情けをかけたら死ぬ。
やれやれ、と思いながら僕は台所に向かった。

という訳で、僕は夕食を甲斐甲斐しく作る羽目になった。
退院のお祝いをしてくれる気はあるらしく、姉貴がケーキを買って来てくれたのだが。
「わたしは陸人の作るご飯好きだぞ！」
「そうか。嬉しいな」
九重に言ってもらうとやる気が出る。
嘘をつくことがなさそうだからな。
一回嘘をつかれたことはあるけど、一回の嘘で人の評価を下げる僕ではない。
ましてや九重だ。
一、二回嘘をついたくらいのことで嫌いになんてなるモノか。
僕の為に一回死んでくれた身だぞ。
そうそう信頼が無くなったりはしない。
あのことは、感謝している。
僕が死ぬとは思っていなかったけれど、僕が死ななかった結果九重が死んでしまったのだから。
感謝と同様に罪悪感もあるのだけれど。
それに対しての答えは。
「愛する男に罪悪感なんぞ持たれて嬉しい女などいない。
感謝してくれるのは嬉しいが、気に負うのだったらやめてくれ。」
九重は僕に笑ってそう言った。
格好良いんだよ。
僕の彼女は。
自慢の彼女だ。
今までは自分が死ぬことなんてあり得ないと思っていたし、今も少なからずそう思っているけれど。

少し変わったことがある。
九重の為にならなら、死んでもいいかな、と思うようになったこと。
九重に言ったら怒られそうなので、本人には言っていないが。
本気で、そう思っている。
ベタ惚れだ。
チョー好き。
言わないけれど。
恥ずかしくて言えないもん。
小心者だから。
僕の腕にひっついていた九重が僕の顔を覗き込みながら言う。
「陸人ー？」
「ん？」
「その煮魚はもう食べれないかもな」
「は？っと、うぁああ！！！」
やっちまった。
僕は九重のことを考えていながら鍋に醤油を入れ続けていたらしい。
鰈が真っ黒な海に溺れている。
魚に溺れているという表現は皮肉なものだな、とか思って。
「もったいな…」
仕方がない。
タマにでもやるか。
煮魚が減ってしまったので、今日の献立は、肉じゃがと、ミソスープ（格好つけないで言えば味噌汁）。
きゅうりの浅漬けと、炊き込みご飯。
時間があったので、まあまあ手間のかかるものにしてみた。
味の濃いものが良いかな、と。
病院食は薄味だったからな。
九重も少し手伝ってくれたのだが、まったくもって動きが鈍かった。
恐らくやりなれていないからだろう。
そりゃそうか。

あんなとこで料理なんて出来ないよな。
燃やすもんとか花と時計塔しかねえじゃん。
時計塔燃やして料理って…。
ぜってえ火傷すんだろ。
そんなこんなで出来上がった夕飯を、六人で食べることにした。
我が家もどんどん家族が増えていくな。
テーブルが狭くなった気がする。
一応親父に電話してみたのだが。
?泊めるのは構わないが、我が家にはそれほど客人用の部屋は無いぞ??
という答えが返ってきた。
いいんだ。
流石、空海家の長なだけあって、寛容だ。
「氷月の部屋に寝せればいいかなー、って」
と言ったら、
?それはやめとけ。女の子もいるんだろう?可哀想だ?
なんて返事が返って来た。
親父からみても氷月は危ないらしい。
ま、確かにくるむちゃんの怯え方からして容易に氷月に近づけてはいけない気がする。
「「「いただきまーす」」」
全員で声をそろえて言って、夕食を食べ始める。
何気に手は込んでいるが、地味な今日のメニューに、客人の皆さんは文句言うことなく食べてくれた。
だがしかし。
静かに食べれない奴が一人。
「かっら!」
突然氷月が叫んだ。
涙目である。
「おかしいと思ったんだよ!あたしだけ煮魚つけてくれるとか!」

タマは美味しそうに魚を食べている。
「ちょ。目ぇ逸らさないでよくが兄！これ失敗したでしょ！？」
「あ、九重。炊き込みご飯きのこあんま入ってなかった？」
「ん？そんなことはないぞ。ほら、椎茸だ」
九重は箸で椎茸を持ち上げてにっこり笑うとそう言った。
可愛いなあ。
「ちょっとくが兄ってば！」
「タマ、五月蠅いぞ」
「タマ！？」
というか何で食べる前に気付かないんだよ。
くつくつと九重が笑う。
氷月はお茶を飲みながら僕を恨めしそうに睨んでいた。
と。
「美味しい…」
ぽつりとそんな言葉が聞こえたかと思えば、
くるむちゃんが、泣いていた。
ひぃい！？
口に合わなかったのだろうか？
泣かせてしまった？！
ど、どうしようか。
「うん。美味しい。こんなん食べたの、久々っす」
くるむちゃんに続いて、今度はらいむくんが、瞳を潤ませて言った。
…ああ、そうか。
そうだな、うん。
二人は今まで、愛情を貰っていなかったから。
まともな食事をとってこなかったから。
普通の食事が、有り難いのか。
それは。
それは、悲しい話だ。
「お母さん…」

くるむちゃんの頭を、らいむくんは優しく撫でる。
「に、肉じゃがのおかわりはまだあるんだぞ」
二人が泣いてしまったことに、慌てたらしい九重は焦ったように言う。
それがおかしかったようで、らいむくんはくすくすと笑った。
「あざっす。良く味わって食べます」
タマと言う名の生け贄をらいむくんたちにしなくて良かったなぁ、と思った。
氷月も許してくれそうな雰囲気を漂わせているし。

死　死　死　死　死

洗い物は姉貴が代わりにやってくれた。
退院祝いのケーキを食べた後は、最早恒例になりつつあるテレビゲーム大会。
今回は最大四人まで対戦できるタイプのシューティングゲームだ。
僕は姉貴とソファで観戦。
九重と氷月対らいむくんとくるむちゃんのタッグバトルだった。
ちなみに九重は前よりは上手くなっている気もしなくはないが、お世辞にも上手とは言えなかった。
対してらいむくん&くるむちゃんはやけに上手い。
こうしてやるのは初めてらしいのに、コントローラーさばきが神ってる。
すご。
ゲーマーとしては名高い氷月でさえ、二人には苦戦していた。
まぁ、九重というハンデもあるしな。
見た目はそこそこ可愛い我が妹を入れて見ても、この四人がゲームをしているのは目に優しい刺激を与えてくれる光景だ。
「姉貴はやんねえの？」
「陸人さん。あれは四人対戦ですよ？」

「いや、知ってるけどさ。代わってもらえばいいじゃん？」
「子供たちをどかしてやるほど大人げなくないです」
いや。
九重は子供じゃないぞ？
年齢知らんけどさ。
少なくとも十九は超えているのだ。
子供ではないだろう。
ま、いいけど。
姉貴が入ればすげえいい絵になるな、と思っただけだし。
「そんな不純な動機で勧めないで下さいな」
…また心を読まれた。
ちょっと姉貴が引くようなこと言ってみようか。
「姉貴、お姉さまと呼んでも宜しいでしょうか」
　全然関係ないけど姉貴って寛容な人だよな。
ツッコまない方がいいのだろうか。
「それならばこちらはダーリンと呼ばせてもらいましょう」
……。
受け止められたうえに、切り返された。
姉貴にダーリンって呼ばれたら僕が変態みたいじゃないか。
いや、負けちゃ駄目だ。
「冗談だよ。あ、そういえば僕、こないだ黒板消しを人に向かってはたきたくなったんだ」
「そういうことは良くありますね。姉さんもこの間知らない人に向けて生卵を投げました。スーツが汚れてしまっていて、申し訳なく思いました」
「鬼畜か！！！というか実行したの！？」
「冗談です」
「冗談じゃない！」
「バレましたか」
「マジで！？」

思ってたより恐ろしいことをする人だった。
完敗だ。
引かせようと思ったのにこっちが引いたわ。
ドン引き。
ま、冗談なんだろうけど。
冗談…、だよな？
きっと冗談だ。
冗談だと信じたい！
…名も知らないスーツの方、どＳな姉貴にやられたそうで。
ご愁傷様です。
少しどんよりとした気持ちでテレビに目を戻すと、らいむくんが九重のヒットポイントを零にしたところだった。
『３Ｐ　ＫＯＫＯ』が？ぐわぁぁあああ？と、声をあげて画面からフェイドアウトした。
どうでもいいけど、倒れる時の叫び声が妙にリアルなゲームだな。
「陸人ぉ～」
九重がコントローラーを放り投げて僕の元にやって来た。
うわ。
ちょっと泣いてるし。
どうやら少し目をはなしていた間にらいむくんたちにコテンパンにやられたらしい。
「よしよし大丈夫かー」
「わたしだって一生懸命頑張ったのに…っ」
「分かってる分かってる。見てたから」
「うぅ。らいむとくるむは上手すぎじゃないか？」
九重が僕にくっつきながら恨めしそうに言う。
九重が下手なのだ、とは言えないな。
「千切さんが下手なんですよ」
言ったー！
姉貴はサディストだからな…。

「むう…」
九重はしゅんとしたようにうな垂れる。
やべえ。
可愛い。
落ち込んでる九重めっちゃ可愛い。
「あ、陸人やらないか？　わたしの代わりに！」
九重が僕を見上げて言った。
僕が入ったくらいで何も変わらないだろうけどな。
氷月がいていい勝負か。
丁度くるむちゃんと氷月が相打ちで終わったので、僕は九重の代わりにコントローラーを構えて第二戦に参戦した。

「……」
「……」
「……」
「…えっと。…ごめん？」
結果的に、ヒットポイントを少しも減らすことなく。
氷月の力を殆ど借りず。
僕の圧勝だった。

「大人気な…」
氷月に言われて、僕の器の小ささを実感した。

オチって大事

正直言って。
僕は現状を甘く見ていたのかもしれない。
客人から先にお風呂に入れたのだが、らいむくんが風呂からあがって来た時。
僕は絶句した。
白ランを脱いで、僕のTシャツを着ているのだが――
今は思い切り夏であり、貸すTシャツは勿論半袖になる。
先程とは違ってはっきり露出している肌。
白い肌がどう、とかではなく。
――全身が傷だらけだった。
切り傷だけではない。
刺し傷や、青紫に変色した痣。
一番酷いのは、火傷の痕。
――焼け爛れて、皮膚がぐじゅぐじゅになっていた。
痛々しくて、見ていられないほどに。
顔も、湿布じゃ覆えないほどに、大きな痣と、火傷の痕があった。
風呂に入るのは、痛かったんじゃないか。
「ら、らいむくん…」
「言ってなかったっすか？俺の力は一日十二時間しか使えないんすよ」
らいむくんは何てことなさそうに言う。
「時間切れ(タイムオーバー)すね」
そうか。
らいむくんは姿を変えられるのだ。
今までは、姿を変えて傷を隠していたんだ。
僕は、馬鹿だ。

痛くない筈なかったのに。
気付いて、あげられなかった。
「いや。気にしなくっていいすよ」
気にしないわけが、ないじゃないか。
二人には、日常茶飯事の、ことだったのだ。
死にかけることは。
もっと、気にかけてあげるべきだった。
「あの？」
「今度アイス奢ってあげるね！」
「は？」
アイスで元気になってもらおう。
「貴様は本当にたわけだな」
九重が隣でぽつりと言った。
あれ？
なんか変なこと言ったかな？
「まあ風雲さんには驚いたっすけど」
らいむくんは湿った髪をいじくりながら、言う。
確かに。
姉貴にはらいむくんの傷が見えているようだった。
姉貴のことだから、あんま不思議じゃないけど。
「あの人も、いい人っすね」
らいむくんは淡い笑みを浮かべて言った。
「うん。姉貴は、僕の誇りだよ」

死　死　死　死　死

部屋割りは、僕とらいむくん、九重と氷月、姉貴とくるむちゃんということになった。
お風呂からあがってきたくるむちゃんは何があったのかは知らないが、姉貴にめっちゃ懐いていた。

ぴったりくっついている。
くるむちゃんの肌は、らいむくんと同じように。
いや。
らいむくん程は酷くはない。
けれどやっぱり、傷だらけだった。
それを姉貴に処置してもらっている。
今までセーラー服と白衣で隠していたのか。
何故白衣を着ていたのかが、分かった気がした。
確かに、白衣はスカートよりも長いもんな。
そんなくるむちゃんに迫る変態氷月。
「るむたん？大丈夫～？」
「ひっ…」
氷月には完全に苦手意識を持っているようだ。
てか、るむたんって。
無駄になれなれしいのが癪に障るな。
「氷月さん。怖がらせないで」
姉貴にぴしゃりと言われた氷月は残念そうに九重の元へ向かった。
歯を磨いていたらしい九重は、
「ちっぎり～ん？」
「ふぎゃぁああっ！！！」
いきなり背後から抱きついてきた氷月を反射的に背負い投げしていた。
「あ！？ああ！すまない！ひ、氷月？」
氷月は床に倒れたままぐっ、と親指を立てて目を閉じた。
「ひっ、氷月ぃいいい！！！」
完全に気を失っている氷月をゆっさゆっさと揺らしながら叫ぶ九重。
僕からしてみれば良くやった！という感じなのだが。
氷月は百回くらい痛い目を見るべきだと思う。
それでもなおらないだろうけど。
「…あの人は本当に何なんすか」

「僕が分かるような次元には生きてないよ。あいつは」
生まれんのが早すぎたんだな。
百年後くらいならこの次元にも順応できたかもしれない。
「んじゃ、今日は何しようか」
僕はらいむくんに言う。
「はい？」
「恋バナは無理かもなー。僕の初恋九重だし。面白くないよ？多分」
「何言って…」
「え？だって今日徹夜じゃん？」
読者の皆様はお忘れかもしれないが、らいむくんは眠ることが出来ないのだ。
それならば、僕も必然的に眠らないことになるだろう。
「いや。気にしなくていいっすよ。寝てて下さい。羊六万匹くらい数えてたらあっという間に朝なんで」
「いや。羊六万匹も数えてる人の横で寝んの無理だから」
「大丈夫っす。指折りで数えたりはしないんで」
「何が大丈夫なのかな？」
数字を間違えることはないとかそういうこと？
どうでもいいし。
「ま、いいや。じゃ、百物語にしようか」
「明日は学校なんじゃ？」
「うん。そうだよ」
「徹夜はまずいんじゃ…」
「授業中寝ればいい！」
「陸人さん」
いつの間にか背後に姉貴が立っていた。
殺気を感じる！
「と、いうのは冗談で…。帰って来てから爆睡すれば問題ないかなー、と」
「…すんません」

「弟が出来たみたいで嬉しいもんだね。こういうの」
「初めての弟と妹っすか」
…。
うん。
氷月の存在が無かったことにされていることには笑ったほうがいいのかな?
あははは!
ざまぁみろー。
と。
部屋に戻るかな。
風呂も入ったし。
歯磨いて準備万端!

死　死　死　死　死

結果。
百物語は中止。
らいむくんの話が思っていたよりもずっと怖かった。
語りがめっちゃ上手いうえに、話が必要以上にリアルだった。
ぶっちゃけもう夜にトイレ行けねえかも。
ま、ということで。
笑い話に切り替えた。
「こないだ下校途中におかしな女の人にあってさ。いきなり結婚しろとか言ってきて」
「へえ。千切さんは大胆って話っすか」
「何故九重のことだと分かった!?」
「顔見れば分かるっす。というか面白くないすね」
「うん。僕も思った」
「じゃ、俺が話します」
らいむくんは何故か重たい感じの低い声で、

「とある茜色の空が美しかった夕暮れのことです。一人の男性が、横断歩道を渡ってました」
「ふんふん」
「すると、反対からどことなく暗い印象を見せる小さな女の子がこちらに向かって横断歩道を渡って来ます」
「あれ？」
「彼女は頬がうっすら赤く、髪もぼさぼさで、全身が汗でびっしょり濡れていました」
「あれれれ！？」
「気味の悪い少女だな、と思っていたら――――」
「怖い話じゃねえの、これ！？」
「らいむくーん！！！」
「少女はいきなりフッと、姿を消しました」
笑い話の筈なのに！！
どうして止めてくれないの！？
「少女は横断歩道の真ん中にあったマンホールにおっこっちゃったんですね」
「ん？」
「病気で、病院に向かっていたとこだったんす。間抜けっすね」
ああ。笑い話か。
いまいち笑えないけど。
「ま、横断歩道の真ん中に蓋の空いたマンホールなんてあるわけないんですけど」
「やっぱ怖い話か！？」
「少女は死期が迫ってたんすかね？」
「うん！どうなんだろうね！？もう次いこっか！」
「お迎えが来ちゃったんすね」
「次いこっか！？」
「ちなみに男性は少女が姿を消したことに驚いていたので、赤信号になったことに気付かず、車に轢かれてしまったんです」

らいむくん！
もういいんじゃん！？
止めようよ！
「それではあの女の子は実は死神だったのか」
ああー！
これから尿意を催したらどうしよう！？
ぜってえトイレ行けねえ！
「ま、一番不思議なのは、少女も男性も死んでしまったのに何故この話が語られているのか、ですね」
と。
語り終えたらいむくんの顔は実に楽しそうな笑顔だった。
それからもらいむくんは止めても怖い話を語り続け（今の話よりも断然怖い話ばかり）、小心者の僕をいたぶり続けた。
朝までのこのやり取りは、僕の精神をすり減らしていった。
らいむくんは姉貴と同じ人種だということが十分に分かった一晩だった。
らいむくんのどSっぷりを垣間見てしまった。

設楽ノ黄泉中学校

僕の二週間ぶりの登校の前に。
やっぱり学生は学校へ通うべきだと。
らいむくんとくるむちゃんの中学校編入の手続きを取りに行った。
姉貴と僕が付き添って、四人で氷月の通う市立中学の、設楽ノ黄泉中学とかいうふざけた名前の中学校の校長先生に話をしに行った。
校長は更科兄姉の名前を見て眉をひそめた。
まあ。
気持ちは分かる。
「ええと。名前が…何とも面白い名前で…」
「そうですか？先生程じゃありませんよ」
姉貴は笑顔で言う。
ちなみに校長の名前は佐々木博文とかいう珍しくも面白くもない名前である。
「では。とりあえず戸籍と住民票を…」
「ありませんね」
「ええっ…！？でも…それじゃ…」
「でっちあげて下さいな」
「そんなことをすれば私が…」
「無理ですか？」
「あ…。い、いえ。やってみましょう…」
どうにも気の弱そうな校長に感じるが、実際はそんなことはない。
威厳のある、格好良い校長先生だ。
僕もこの中学の卒業生なので、普段の校長先生の堂々とした感じは知っている。
しかし。
姉貴の前では別だ。
どうやら校長は姉貴に逆らえない理由があるらしく（詳しくは秘密

だそうだ）、姉貴の頼みに首を横に振ることはないということだ。
「じゃあ。編入…ということで…」
「明日からですね」
「明日！？い、いや。良いんですが…。もうそろそろ夏休みですよ？」
「だからこそ。早めに」
「そ、そうですか。分かりました」
校長は頷いて次はらいむくんとくるむちゃんに目を向ける。
「なにか質問とかはあるかね？」
ここでらいむくんのどＳっぷりが発揮される。
「この学校の教育方針はどういうものなんですか？」
校長はにっこりと笑って、まってましたとばかりに答える。
あーあ。やっちゃった。
「ああ。それは。学ぶことの楽しさと仲間と協力することの大切さを知る、というものだよ」
「それは理解出来ないっすね」
「え？」
らいむくんは無表情に。
「学ぶことの楽しさなんて永遠に見いだせないっすもん」
「そ、それをここで知るんだよ？」
「じゃあ逆に訊きますが。あなたは学生のころに学ぶことに快楽を見いだせましたか？」
「も、もちろん」
「一度も勉強が面倒だと思ったことはないと？」
「そ、そうだね」
「嘘つきは指導者としてどうかと思います」
らいむくんは淡々とした口調で言う。
「嘘なんてついてないよ」
校長の顔に引きつった笑顔が浮かぶ。
「嘘ですよ。勉強が面倒だと思わない人なんていないです。夏休み

の宿題を楽しんでやることが出来ましたか？」
「……」
「第一宿題は必要性を感じないんですが」
「そんなことはないぞ。宿題は勉強の復讐で」
「分からないところを教えてもらうことは出来ないし、簡単に人のを写せるんですよ？意味ないじゃないですか。大体宿題で復習が出来るのなら教科書で自主学習は十分にできます。学校なんて必要ないじゃないですか」
「そういうことを言っているのではなく…」
「要は。言いたいことは一つだけなんですよ」
子供らしくない――いや、子供らしい屁理屈をつらつら述べて。らいむくんはあくまでも無表情に。
本題を言った。

「学校は嫌いです」

なるほど。
だから少しテンションが低かったんだ。
ここに来る途中なんか元気ないな、と思ったんだよ。
学校、嫌いだったんだ。
まあ、名前を馬鹿にされたとかいう話もしてたし、そこは少しトラウマ的なものがあるのかもしれない。
らいむくんから聞いた話だと、学校には小学校低学年の頃しか行っていないみたいなので、学力がみんなに追いついていない、ということが不安なのかもしれないし。
ただ。
傷の痕を見られるのが嫌なのかもしれない。
それでも。
行ってもらわなければ。
学校でしか学べないものは、絶対にあると思う。

勉強云々ではなく。
もっと他のことで。
氷月が中学に行っていたおかげで救われたように。
なので。
らいむくんを取り押さえて口を封じた。
「むぅ！！？ぅううむむ！！！」
らいむくんは僕を見上げて呻く。
あっはっは！
文句は言わせないぜ！
くるむちゃんが僕をぼかぼか叩いてくるのが地味に痛かったが、気にしない。
「いづっ…！」
まさか。
噛まれた。
びっくり。
人に腕を本気で噛まれたのは初めてだ。
くるむちゃんは犬みたいだな。
「（学校行ったほうがいいって。いつか絶対思うから！）」
僕は二人に小声で言って、くるむちゃんを剥がす。
らいむくんが落ち着いたのを確認して、手を離す。
二人とも顔を見合わせて、渋ったような顔をしていたが、やがて諦めたように溜息を一つつく。
「ま、お世話になっている身なんで、これ以上の文句は言わないっすけど」
「……」
くるむちゃんもらいむくんの言葉に静かに頷いた。
二人とも普通に良い子なんだけどなあ。
何というか…。
どっか残念なんだよ。
「じゃ、博文さん。宜しくお願いしますよ」

「はい…。分かりました。空海さん」
こうして。
多少無理やりな感じの否めないやり取りを終え、双子を中学校に編入させることに成功した。

死　死　死　死　死

「久々の登校で遅刻か」
「悪いな」
「いんや」
三限目の丁度終わった頃、学校に登校した僕に、前の席の那凪(ななぎ)乃熊(のぐま)が話かけてきた。
「なに？また九重さんになんかされたワケ？」
那凪は羨ましそうな目を向けてきた。
「今日は九重じゃない」
「姉ちゃんか？」
「んー。ま。そこはあまり気にしない方向で」
「そういえばお前ん家に可愛い女の子たちが入って行くのを見たって人が…」
「なあ。こんな話を知ってるか？」
「話を逸らすなよ…」
おいおい。
なんて狭いんだこの町は。
僕の個人情報モロバレしてそうだな。
歌とか歌ってんの聞かれてたりして。
恥ずかし。
「おーう。座れー」
チャイムが鳴ると同時に、担任である須田野(すたの)が入ってきた。
つまり四限は現国ということか。
「うーし。じゃあ人に犬と書いて伏せろー」

いきなりそんなことを言われても。
「嫌だー」
「先生どーしたの。乱心？」
周りからはあははといった感じの笑いが起こる。
須田野の意味不明発言は結構日常茶飯事。
「冗談だ。勉強がしにくいうえに寝る奴がいそうだからな。おい、那凪。ほんとにやらんでいい」
那凪は机の下に潜り込もうとしていた。
「何してんの」
「いや。伏せろって…」
「あれって生徒どもは犬だ的な侮辱だと僕は受け取ったんだが」
「ああ。そうなのか」
那凪は素直な奴だな。
しかし。
周りちょっと引いてるから。
素直過ぎんのもどうかと思う。
「ん？おお。原因不明の大怪我を負って期末サボった空海じゃないか」
「何て言い方するんですか！」
まぁ確かに原因不明の怪我ってことになってはいるんだが。
だって“狭間”で怪我したなんて言えないじゃん？
だけどあんまり問い詰められなかったのは、何度か原因不明の怪我で入院したことがあるからだろう。
今までの原因不明の怪我での入院はほぼ全てが姉貴か氷月がらみだったが。（今までの怪我は院長に怪我の理由を聞かれた時に馬鹿馬鹿しくて答えられない理由ばかりだった）
今回は違うんだ。
「怪我大丈夫なのか？」
「大丈夫…ですよ」
少し間があったのは、くるむちゃんや氷月に痛めつけられたことを

思い出したから。
今思い出してもむかつくな。氷月は。
くるむちゃんは可愛いから良いけどさ。
「じゃ、授業始めんぞ。ノートの三十八ページを開けー」
須田野がだるそうな口調で言った。
「せんせー。ノートにページ数は書いてありませーん」
誰かの言葉に、ちょっと赤くなりながら、
「じゃあ書けー」
と言う須田野。
あれはガチでノートと教科書間違えたんだな。
それ以上ツッコむことをしない僕のクラスメイトたち。
みんな優しいなー。
とか思ったり。

死　死　死　死　死

昼休みを挟んで、五限目。
丁度お腹も膨れて眠くなってくる時間帯。
数学?の大西の言葉を聞いていると段々眠くなってくる。
冷房が丁度良い具合に効いている教室内は寝るのには最適な空間だと思う。
眠っているところを先生に見つかってはいけない、という緊張感がどうも眠気を煽(あお)る。
昨晩は一睡もしてないわけだし。
正直、かなり眠い。
枕が机という寝心地としては最悪な環境ではあるが、睡魔が襲ってきた今はそんなこと関係ない。
しかし。
うとうとと、意識の薄れ始めた頃。
僕の眠気は一気に吹っ飛んだ。

がっしゃん。

と。

変な音をたてて教室の扉が開いたかと思えば。

そこに、一人の少女が立っていた。

茶髪のツインテール。

吊り目の、普通な美人。

設楽ノ黄泉中学指定のブレザーを着た、見覚えありまくりの少女。

「お兄ちゃん！」

僕を見つけて笑う少女は。

――――空海氷月の姿をしていた。

―ツヴァイ―　忍足　苦無

「ひ――――づき…？」
氷月は跳ねるように僕の元へ駆け寄ってきた。
ので。
とりあえず足を突き出して、氷月の足を引っ掛ける。
びたん。
と。
勢いよく床に突っ伏す氷月。
「鬼のようなことをするな」
那凪が苦笑混じりに言う。
「だって」
氷月が僕の学校に訪ねに来るなんてろくなことじゃない。
はあ、と溜息をついて。
鼻をさする氷月を見下ろしてから、何事かとこちらを窺っているミス大西に目を向ける。
「あのー。なんか知り合いに見える子がすごい勢いで走ってきた結果、何か障害物的なものに躓いて負傷した模様なので、手当をするためにも今日は早退します」
長ったらしい言い訳をして、氷月を立ち上がらせると、スカスカの鞄を持って教室を出る。
氷月も後ろからついてきて、ざわついている教室の戸を閉める。
　無言で氷月の前を歩く僕。
後ろで僕を気遣うようにこちらを窺っている氷月。
下駄箱のあたりで。
「何しに来たんだよ」
訊く。
「お姉ちゃんが倒れたの！」

氷月は慌てた風に言う。
「ふうん。で――」
僕はそこで氷月に目を向けて。
一番気になっていたことを問う。
「あんたは誰よ？」
これは。
この少女は。
氷月だけれど、僕の妹ではない。
「なに言ってんの？おにーちゃん！」
氷月はご冗談を、といった顔で言う。
僕は再度訊く。
「お前は誰だ」
すると。
氷月は小さく笑って、
「あれ？ばれないと思ったんだけど…。馬鹿だと思ってたから」
と、言う。
馬鹿は余計だ。
「僕の妹は僕のことをお兄ちゃんとは呼ばないし、あんな足引っ掛けにかかったりはしない。それに――」
僕は自身を持って、
「――姉貴が最強だということを知っている」
きっぱりと言う。
それを聞いた氷月もどきは。
あっさりと姿を変えた。
その姿は。
白い学ランに、肩までの茶髪。
ほんわりとした緩い印象のある瞳。
――らいむくんだった。
そうか。
らいむくんは、姿を変えられるんだ。

なんて。
なんて思ったりは。
「なんて思ったりはしない」
「は、え？陸人さ――――」
「らいむくんは」
僕はらいむくんの言葉を遮って、言う。
「頭のいい子だよ。だから。氷月の姿で僕のことをお兄ちゃんって呼ぶなんて単純なミスはしないと思う」
これは完全に。
勘なのだけど。
「ああ。そういう…ね」
らいむくんはお手上げ、という風に。
本当に両手をあげて。
苦笑を浮かべながら言った。
「僕もあまり賢くはないからね。気付かなかったなぁ。はっはっは」
そいつは楽しそうに笑う。
「ふうん。面白い男じゃないか。陸人くん」
「誰だよ？」
「更科らいむだよ」
「あん？お前――――」
「半分は本当だよ。そう怒んなって」
そいつはにたりと笑みを浮かべて言う。
同じ笑顔でも――――
感情の違いによってここまで変わるもんなのか…。
気味の、悪い笑顔だ。
「この体はらいむの物で、間違いない」
「んなワケ――――」
言いかけて、止めた。
見た感じも、声も、包帯の位置も、全てがらいむくんと同じ。
違うのは中身だけ。

姿を変えるというチカラも、らいむくんのものだ。
こいつは―――。
何者だ…？
「ははは。意味が分からないって顔をしているね。これで分かるかな？僕は―――」
そいつはあげていた両手をゆっくりと下ろして、言う。

「らいむとくるむに、チカラを与えた者だ」

「お前が―――？」
僕は、眉をひそめて訊き返した。
「ん。あの子ら風に言えば。青い帽子の男？それ、僕。忍足苦無（おしたりくない）くん。くないって呼んでよ」
へらへらと。
男―――苦無さんは笑う。
らいむくんの体で、笑う。
「くない―――さん」
僕は一歩下がって、苦無さんに話かける。
「何だい。陸人くん」
苦無さんはにこやかに答える。
「何故、僕の名前を？」
僕の問いに苦無さんは可笑しそうに笑う。
「ははは。何を言ってるんだ、君は」
続けて。
「君のことを知らない管理人はいないさ」
なんて、言う。
管理人？
こいつは…。
「2（ツヴァイ）。僕は忍足苦無である以前に、2（ツヴァイ）という名の管理人なんだよ。君のことを知らない訳がない」

苦無さんが…、管理人？
「フォーを…。４を誑かした人間。空海陸人、くん？」
「ふぉー？」
「君にベタ惚れの子。千切のことだよ」
ふうん。
ふうん？
頭がこんがらがってきたぞ？
「んん…？ま、いいや。で？九重を迎えに来たのか？」
懲りずに、九重を連れ戻しに来たのか。
「いいや」
僕の予想を、苦無さんはあっさりと否定した。
「僕自身は千切には自由に生きて欲しいと思ってるからね。どうでもいい、と言っても過言ではないかも」
苦無さんは本気でどうでも良さそうに、言う。
「僕は管理人なんかよりも、人間に興味津々なんだ。君とか。らいむとくるむとか、ね」
「それは――」
「人って一日何人ぐらい死ぬと思う？」
「え？」
「数えんのがだるくなるくらい、沢山死ぬんだよ」
苦無さんは、少しさみしそうに笑った。
「僕らは川を渡って自ら死んでいく馬鹿と、死に対抗しようとする馬鹿を、毎日たくさん見ているんだ。それくらい、“狭間”にくる人間は多い」
「苦無さ――」
「君も千切から聞いているかとは思うが、管理人は“狭間”から出られない。故に――」
外の世界が知りたくなった、と、苦無さんは言う。
自分達とは違って時間に限りのある人に、興味が湧いた、と。
「らいむとくるむは、“狭間”に幾度か入って来たんだ。二人は、

覚えてないかもしれんが」
「あ…」
“狭間”は。
死にかけて精神の離れた者が、世界の理からズレた者が、入ってしまう場所だ。
つまり。
常に死と隣り合わせだった二人は、それだけ“狭間”に入る機会が多かった――。
「“狭間”に来たやつはさ、殺さなくちゃならないんだけど…。僕は二人に、興味が湧いてしまった」
苦無さんは、ははは、と笑う。
――俺が死んだら、姉ちゃんは助かりますか。
初めてらいむくんが“狭間”に来た時に、苦無さんに言った言葉。
――らいむが悲しむくらいなら、生きて拷問のようなあの日々を過ごすことを選ぶ…。
初めてくるむちゃんが“狭間”に来た時に、苦無さんに言った言葉。
二人は、いつも互いのことを優先していたらしい。
苦無さんは、二人に興味を持った。
だから、二人が“狭間”に来る度にこっそりこっちに送り返したそうだ。
“狭間”での記憶を消して。
二人が生き続けることを願って。
そしてその状況が。
二十回目になった時。
苦無さんは遂に、手を貸してしまった。
本来してはいけないことをしてしまったのだ。
二人の願いを叶える――手伝いをしてしまった。
これ以上この二人が危ない目には遭ってほしくない、と。
願ってしまった。
願うは、罪。

分かっていた、筈なのに。
「僕は、二人の世界を、狭めてしまったんだよ」
苦無さんは、笑って、言う。
悲しそうに、笑って。
「僕の世界を広げた代わりに、二人の世界を狭めた」
「どうやって、二人にチカラを…？」
「僕の能力。僕はさ、人に与える能力を持っているんだ」
「与える…」
「そう。僕のもつ四百六十二のチカラのどれかを、与えることが出
来る」
苦無さんは、誇らしげに言う。
「ま、でも。使えないんだけどね」
それから苦笑して、付け足した。
「与えては、いけないモノだから。自由を奪う、モノだから」
「自由を——奪う…」
「分かるだろ？僕の所為で——」
らいむは夢を。
くるむは色を。
それぞれ、失ってしまった。
と。
苦無さんは、申し訳なさそうに言った。
「でも、僕に二人の夢と色を返すことは出来なかったんだ。“狭間
”と繋がることは、死にかけた人間でないといけないから、な」
でも。
と。
苦無さんは。
らいむくんの姿をした苦無さんは言う。
「管理人である千切と——君は違う」
「僕はそんな——」
「実際僕は、千切を遣ってらいむをこの近くまで連れてきた。僕は

“狭間”の人間を操ることも出来るからね。そしたらやっぱり。予想通りに君に近付けば——らいむを操ることが出来た」
「え？」
「意味、分かるかい？」
意味なんて。
馬鹿な僕が分かるはずもない。
それを見た苦無さんは、やれやれといった風に、つまり、と言う。
「君の周囲は、“狭間”と繋がっているんだよ」
「はい？」
「君の周囲に入った者は、全てじゃないが、“狭間”の影響が及ぶ。だかららいむを操れた」
「そんなこと…」
「千切は僕の支配が途切れた途端に“狭間”に入ったよ。僕が近くにいたからね。戻らずにはいられない。テンパって僕らとは反対の方向に走って行ってしまったよ」
ははは、と苦無さんは笑った。
そして。
「そんなことはいいから」
と言う僕に、口を噤んだ。
「二人を、元に戻してあげてよ」
僕は、言う。
「らいむくんに夢を。
くるむちゃんに色を。
戻してあげてよ」
そんな僕の言葉に。
らいむくんを操る苦無さんは。

「うん。いいよ」

儚い笑みを浮かべて言った。

苦無さんの話では。
僕がいればらいむくんとくるむちゃんの夢と色は取り戻せるそうだ。
理屈はよく分からなかったのだけれど。
まあいいか。
小さいことは気にしない。
「ただ、戻すにも代償が必要なんだよ、陸人くん」
苦無さんは言った。
「何が代償になるかは分からないけれど。そのことを二人に伝えて、同意を得たうえで、夢と色を返そう」
ということで、苦無さんの操りが解けたらいむくんと、家路についている途中。
「なるほど…そういう感じすか」
らいむくんは僕の話を聞いて納得したように頷いた。
「俺はそれでも…戻りたいすね。…というか。くるむに色を戻してやりたい」
らいむくんは真っ直ぐに前を見て、はっきりと言う。
妹想いの――――姉想いのらいむくんである。
そういう返事がくることは分かっていた。
「そっか」
僕は静かに頷いた。
そういえば九重はどうなったんだろうか。
ちょっと、思ったり。
家に着くとまず、姉貴にドロップキックをくらわされた。
サボりを許してくれる姉貴ではないのだ。
事情を説明したところ、納得はしてくれたけれど、キックに対しての謝罪はなかったので、怒ってはいるようだ。

それから、くるむちゃんにも苦無さんから聴いた話を説明した。
くるむちゃんは、
「こんなにあっさり戻れるとは思わなかった…」
と、嬉しそうに言っていた。
ようし。
二人に、夢と、色を。
返してあげよう。
戻してあげよう。
そのために、僕は二人に出会ったんだ。
きっと。
更科来夢と更科来夢。
可愛い双子の兄姉。
僕らの出会いに、意味があるのなら。
僕らの出会いが、運命だったのなら。
それは、嬉しいことだ。
二人の為に――
全力を尽くそう。
といっても、僕は何もやることが無いのだけれど。
ただ、見ているだけ、なのだけれど。
見ていることしか、出来ないのだけれど。
それでも。
見ていることは、出来る。
とか。
そんな、ことを。
そんなことを考えてしまっていた。
願いを叶えるは、罪なのに。
夢を取り戻したいというらいむくんの願いも。
色を取り戻したいというくるむちゃんの望みも。
叶えてはいけないものに、変わりはないのだ。
そう。

罪を償うというのは―――
そう容易いものでは、なかったのだ。
　そして。
　唐突に。
なんの前触れもなく。
二人の願いは叶ってしまった。
「あ…」
くるむちゃんが声をあげた。
「でんき…ついた」
今までくるむちゃんからすれば真っ暗だった部屋に、明かりが灯った。
くるむちゃんの瞳は色を取り戻したのだ。
ということは、らいむくんの夢も、戻ってきたのだろう。
それは夜になるまで分からないけれど。
とりあえず。
「良かったね、くるむちゃん」
僕が言うと、
「え？」
と。
らいむくんが驚いたような声をあげた。
次に、信じられない言葉を吐いた。
「いつの間に、くるむ出てったんすか？」
え、え？
嘘、だろ？
最悪な想像が、頭をよぎった。
「あれ？兄さん、といれ…？せっかく色、戻ったのに…」
くるむちゃんの言葉に、僕は目を見開く。
まさか。
まさか！
「そんな…」

そして、最悪な想像は現実になる。
そう、あっさり願いは叶う筈がないんだと。
思い知らされた。
二人の願いの代償は。

何よりも大切な存在の消滅だった。

終結

二人は、互いの存在を感じることが出来なくなってしまった。
姿が、見えない。
声が、聞こえない。
熱を、感じない。

傍にいるのに、それが分からない。
そんな。
そんな状態になってしまった。
等価交換。
願った代償は、想像以上に、大きかった。
「兄さん…！」
「姉さん！」
二人に、互いにどこへも行っていない、ということを伝えると、二人は青ざめて、互いを探し始めた。
「う、嘘だろ！？こんなんありかよ…！？俺には…っ！くるむしかいないのに…。くるむまで…とるのかよっ」
らいむくんが叫んだ。
「らいむっ！？嫌だ…。一人なんて…嫌だよぅ…。らいむぅ…」
くるむちゃんは泣き出した。
それでも。
僕にはどうすることも出来ない。
ただ、見ていることしか…。
「こんな…」
こんなことって。
酷過ぎる。
どこまで、二人を悲しませるんだよ。

と。
「忍足…苦無」
そこに、九重が、入ってきた。
目を伏せて、静かに言う。
「すまない。気が付くべきだった。あやつの、仕業だったのか」
「え…？」
「あやつ…苦無の奴は、ノリで人を不幸にする。らいむとくるむがあやつに会っていたとは思わなんだ。最初のほうは本当に貴様らに興味があったのかもしれんが、後のはただ不幸にしよう、と思っただけだろう」
「そん…な！？」
「……」
苦無さんは、二人の不幸を願っていたのか？
こうなることが、分かっていた…？
そんな。
「やめろ。陸人」
立ち上がった僕に、九重は言った。
決して強い口調ではなく。
あくまで、諭すように。
なだめるように。
「もう…遅い。陸人が苦無の元に行ったくらいで…どうにかなる問題じゃあ…ないんだよ」
九重は、悔しそうに、言う。
「あはは。あははは。あー、愉快愉快。なんて。あやつは笑っているかもしれない。そう思うと、怒りしか湧いてこないな」
悔しそうに、言う。
と。
そこに。
「あの…陸人さん、には。くるむが、見えてるんすよね？」
らいむくんが、僕を真っ直ぐに見て、言った。

「あ、え…うん。くるむちゃんは君の隣に、ちゃんと、いるよ」
僕は目を伏せながら、答える。
「そっすか。良かった。…それなら」
くるむに、伝えて下さい、とらいむくんは言う。

「九重…さん。らいむは…」
くるむちゃんも、九重にらいむくんの居場所を尋ねている。
「あ。ああ。陸人が言っていたように、確かにくるむの隣にらいむはいるぞ」
九重も、目を伏せ気味に、答えた。
「じゃあ…」
らいむに、伝えて下さい、とくるむちゃんは言った。

そして、二人同時に、同じ言葉を紡ぐ。

死　死　死　死　死

その事件は、あまりに。
九重と僕の巻き込まれた事件とは比べ物にならないほどにあっさり終わった。
けれど。
その結末はあまりにも、悲惨過ぎた。
世界で一番大切な存在を失うということで、止める間もなく幕は下がってしまったのだ。
らいむくんもくるむちゃんも、寂しそうだけれど、前と変わらず、生きている。
なにも、大きな変化はない。
二人は、強いな。
と、思う。
隣にいて、目も合わせないし話もしない二人の姿を見ていると痛々

しくもあるけれど。
二人が普段通りに過ごしているのだから、それは、触れない方がいいことなのかもしれない。
そして、今日から。
今日、七月二十日から、二人は市立(いちりつ)設楽(したら)ノ黄泉(よみ)中学に通うことになった。
指定の制服は男女ともにブレザーなのだが、二人はそれを拒んだので、校則違反承知で、セーラー白衣と白ラン、という目立つ格好で家を出て行った。
姉貴は二人を心配していたが、氷月がいるということで、大丈夫だろう、と安心した様子で大学へ向かった。
僕も、高校へ向かう。
いつもと変わりなく過ぎていく時間に、理不尽な苛立ちを感じながら。

エピローグ1　―くるむ視点―

大嫌いな、学校に行く。
来夢がいないんだから、行っても意味ないと思うんだけどな…。
それでも、行かなくちゃ。
私は元気だよ、って。
来夢に伝えられるように。
言葉で伝えることが出来ないのだから、行動で伝えなければ。
大丈夫。
あの時、来夢は言っていた。
あの言葉を。
信じる。
私と同じ気持ちだったんだ。
私たちは、心で繋がってるんだ。
あの言葉は、私の希望。
あの言葉があったから。
これからも、頑張れる。
いつか。
二人で楽しく暮らしたいね、来夢。

死　死　死　死　死

「更科さんって、二組の更科くんと、兄妹なんだよね？」
知らない人が声をかけてきた。
どうしよう。
訊かれてるのだから、答えるべきか。
私は、小さくうなずいた。
「可愛い～。更科さん！あ。じゃさ、二人は双子ちゃんなのかな？」

誰だか知らないけど、この人なれなれしいな…。
これが普通なのか？
氷月(あくま)もそうだけど、女の子ってみんなこんな風に話しかけてくれるものなのかな。
でも。
他の人は私のこと遠巻きに見てひそひそ言ってる。
「あれ？更科さん？どうかした？」
やっぱり、この傷かな。
私が俯いたことに気付いたみたいだ。
顔、あげなきゃ。
　ストレートの黒髪を背中にたらした頭の良さそうな可愛い女の子が、笑顔で私を見ている。
「あたし麦原(むぎはら)蒼璃(あおり)。あおりって呼んでよ！くるむちゃんって呼んでいいかな？」
「え…あの。……」
どうしたらいいのか、分かんないよ…。
「氷月の、友達なんだ、あたし」
氷月(あくま)の？
「くるむちゃんの話は、少し聴いてるよ。ウルトラマンみたいで格好良いよね」
ウルトラマン？
「あ。女の子なんだからプリキュアとかのほうがいいかな？」
なに、いってるの。
このひと。
「ね？あたしもくるむちゃんとお友達になりたいの！良いかな？」
なんか、よく分からないけど…。
この人は、いい人なのかな。
私は、頷いてみた。
「ほんと！！？やった！あはは。宜しく！るむたん！」
……。

……氷月め……。

エピローグ2　―らいむ視点―

来夢がいないなんて、へんな気分。
来夢は変なとこで頑張り屋さんだから、慣れないのに知らない子と友達になってたりするんだろうな。
元気だってことを俺に行動で示す、とか考えてんだろ、きっと。
嬉しいけど、無理はしないでほしいもんだな。
しかし。
昨日は、嬉しかったな。
まさか。
同じこと考えてるなんて、さ。
あれで、俺はすごい元気出たんだよな。
学校は嫌いだけど、空海家の人たちのためにも、来夢のためにも行こうか。
結構、いいものなのかもしれないし。
来夢も行くって言ったらしいしね。
頑張ろう。
いつか。
来夢と楽しく暮らすんだから。

死　死　死　死　死

「更科くん」
「来夢(らいむ)でいいよ？」
俺はにこやかにクラスメイトだと思われる女子に応えた。
「あ。じゃ、らいむくん！隣のクラスの転校生ってさ、もしかして双子！？」
「そ。似てるでしょ？俺ら」

「うん！そっくりで驚いた！」
他の女子が言う。
「あはは。でも俺は女っぽいって言われて複雑なんだよね」
「え～？でも、喋ってみると全然男の子っぽいよ？」
また違う女子。
どいつもこいつも…。
くるむより可愛いやつはいないな。
「ほんと？嬉しいな。ん？というかもしかして今俺口説かれてる？なんて」
「あはは。そっかもしれないね！今度どっか行こうよ～」
「ああ、いいよ。誘ってよ（行かないけど）」
そんな感じで、女子どもを適当に流していると。
「空海(そらみ)。双子がお前んちで暮らしてるってほんと？」
教室の隅で友達と話していた氷月に、男子がそんな話をふっかけていた。
「うん。そうだよ」
氷月はお喋りを止めて言う。
「なんで？あの傷とか…もしかして虐待とか？」
はあ。
やっぱな。
ああいう奴らばっかか。
別に本当のこと話してもいいけどさ。
哀れむのはやめてほしいよな。
　話が聞こえていたのか、女子たちが気遣うような目を向けてくる。
こういうとこは、うざいよな。
思いながら、頬杖をつく。
と。
「は？何言ってんの。違う違う！」
氷月はにこやかに否定した。
俺らを庇おうとしてるのか？

「地球を侵略しようとしてきたピカノトラリウス軍団の帝王プロロンテッド二世と戦って負った名誉の負傷だよ！ いむたんとるむたんがいなかったら、今頃地球崩壊してたよ！ 感謝しなよ？」

……。

嘘をつくならもっとマシなのを選んでくれよ。

ぴかのとらりうすって。

言いにくいし。

明らかに嘘だって分かる言い訳は俺らの虐待説をもろ認めてるようなもんだぞ？

が。

「ああ。そうだったのか。すげえな。全然知らなかった。そんなんなってるなんて」

男子生徒は納得したように頷いた。

って。

納得したの！？

あれで！？

ずり、と頬杖の状態が崩れた。

こっちが納得いかないわ。

死　死　死　死　死

「ほんとにあの話、信じたわけじゃないよね」

後で、先ほどの男子生徒に尋ねてみた。

「信じてはいないけど…」

男子生徒は、苦笑いで答えた。

「空海は大嘘つきだからね。本当の答えが返ってくるとはもともと思ってないし」

「大嘘つき？」

「うん。人のことは、絶対に口を割らないよ。言っていいこと悪いこと以前の問題で、空海の口は堅い。自分のことに関してもね。好

きなものとか、誕生日とか、知ってる人なんて麦原くらいじゃない？」
男子生徒は、言う。
どこか、誇らしげに。
「でも。そこが空海のいいところだと思うよ。俺は。あのままの空海でいてほしい」
「大嘘つきの、ままで？」
「ああ。何も知らないまま、ね。汚いところを、見ないでいられるだろ？人間、知らない方がいいことの方が多いんだよ」
「ふうん…」
そうなのかも、しれないな。
「知ってることといえば、綺麗なお姉さんとそこそこ格好良いお兄さんがいるってことくらい」
「それだけ？」
百合だということは知られてないのか。
ふうん…。
「あいつの信頼は厚いよ。絶対に喋らないから、誰にも言えない相談とかはよく受けてたりな。優しい嘘をつく、良いヤツ。って感じ」
男子生徒は、にこやかに、誇らしげに語る。
自分のことのように。
少し、見直したな…。

エピローグ3　―陸人視点―

氷月の話では、らいむくんは問題なく学校生活を送っているらしい。
ま、嘘ではないだろう。
氷月は僕に嘘をつくことはないし。
しかし、くるむちゃんは大丈夫だろうか。
らいむくんは社交的な性格なのもあって、上手くやれてるみたいだけど。
くるむちゃんは人見知りがあるから。
でも、麦原ちゃんが、氷月経由でくるむちゃんを気にかけてくれてるらしいから、案外大丈夫かもしれない。
誰とでも仲良くなれる氷月と麦原ちゃんが協力してくれれば、友達なんて百人くらいあっという間に出来るだろう。

日常は、いつも通りに過ぎていく。
何事もなかったかのように。
僕は今回、自分の無力さをまた強く、実感した。
仕方無いで、片付けていいものじゃないのに。
仕方無いでしか片付けられない自分に腹が立った。

これから、二人のために何が出来るか。
それを考えて、僕が出来る最善のことをしようと思う。
明後日から夏休みだ。
今年は大勢で旅行に行くことになりそうだな。

そういえば。

らいむくんの氷月を見る目に変化が現れた気がするけれど……。

まさか、ね。

エピローグ３　ー陸人視点ー（後書き）

ここまで読んで下さった皆様。
ありがとうございました！
ちょ！ナニしちゃってんの！？
はここで完結となります。
若干分かりにくい話になってしまいましたね・・・。
すみません。

次回、第三弾はもう少し分かりやすい話にしたいと思います。

これからも、宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2247r/

ちょ！ナニしちゃってんの！？

2011年10月8日15時44分発行